

修士 (2015 年度)

うつ病者の手記とはいかなるドキュメントであるか

田村 大有

1. 研究の主題と背景

本研究は医療社会学・医療人類学における重要概念である「病いの語り (illness narrative)」を手がかりとして、うつ病者の手記を対象としたドキュメント分析をおこなったものである。〈うつ病者の手記〉とは、うつ病を患った経験をもつ人々がうつ病にかんして記述し、出版されたものを指す。うつ病という病名には様々な定義があり論争があるが、人々が自らの困難をうつ病と呼び、記述して出版するという社会的現象自体を考察の対象とする。本研究が対象とする手記は、「闘病記」、「病いの自己物語」と呼ぶことが可能である。しかし、「闘病記」「病いの自己物語」と呼ぶことは、あらかじめ研究者が設定した問題系の中に、対象となる出版物を当てはめてしまうことになり、読んだ後に発見すべき主題をあらかじめ先取りしていることになる呼称であると考えられる。したがって本研究では、〈うつ病者の手記〉を「闘病記」「病いの自己物語」として読み始める以外にどのような読みが可能かを考察する。それと同時に、病者が「うつ病について書き出版する」という実践自体に照準を合わせ、それはどのような実践でどのような価値がおかれているのかを問う。そこで用いられる固有の経験を一般的なものとして記述するためのレトリック、ロジックを明らかにする。①うつ病の意味—受容と抗い：うつ病者は、外部からの意味付与を受容したり、抗ったりすることがある。「うつ病とは何であるのか」という問いは、患者にとって、自らの再解釈と他者からの意味付与の交錯する言論空間である。それは具体的にどうおこなわれているのであろうか？②うつ病の問題とそれらへの対処するローカルな方法：うつ病者であることの何が「問題」とされているか、またそれらへ対処するローカルな知識としての「方法」はどのようなものであろうか？

2. 事例研究

手記の中には、うつ病であるための戦略がしばしば書かれている。手記の「まえがき」には、自らの病い経験を記述するものが多いが、ほかに、読者へのアドバイスや対社会に向けてうつ病の実情を訴えるものなどがある。自らが病んでいる時に「読みたかった」本を書きたい、患者や家族に知ってほしいことがあるなどである。そのような記述から、われわれは読み取ることができるのは、「うつ病患者としての戦略」である。手記を出版・公開することは、そうした戦略を周知する言説実践であり、うつ病を「正しく」理解してもらうための異議申立というポリティカルな側面をもつ。

一色伸幸は、次のように書いている。「どういう病気であるかを理解して貰えない。それがうつ病の、一番、厄介な点だ。仮にうつ病一般について把握してくれても、問題は『僕のうつ病』や『あなたのうつ病』で、脳の中で起こる現象だから、個人差も大きい。／／分りにくく、分からせにくいのだ」(一色 2009: 155)。一色の記述が端的に表すように、うつ病者にとって、〈理解〉とは大きな問題となる。そもそもどういう病気か「理解して貰えない」ことにくわえ、うつ病という一般的カテゴリーのもとで「把握」されても(／さ

れるがゆえに)、「僕のうつ病」が「分かりにく」い。このように、うつ病を患うことにより、病の一般性と固有性のはざまにおいて、「理解」ということが問題化される。

覚慶悟(覚 2003)は、専門家の解説書を引用しつつ細かに批判を加えている。覚は、一貫して「心の風邪」という表現にたいして異議を唱える。覚が自身の経験とのかい離について記述する上で、最大の論点としているところは、「心の風邪」という表現についてである。うつ病は風邪のように「ありふれた」「誰でもかかる」病気ではありえなかった。覚は、手記の公刊を通して「僕のイノチガケの異議申し立て」をおこなっている。

うつ病者は休養を勧められるが、うつ病者にとって休養とはどのようなものとして記述されるのか。杉山奈津子(2012)には、「怠けている」ことと「休むこと」をいかに弁別するかが書かれている。この怠けと休むことの違いは、うつ病であるか否かにかかっている。うつ病は病気であり、病気は「自分の意志でなんとかなるものではない」という点が強調される。そして、うつ病が「れっきとした」病気であることは、自明ではなく、「ちゃんと認識」することを喚起されるものである。怠けと休養という似て非なる時間をどう捉えるかが、杉山が考えるうつ病者が休養する上での問題であることがわかる。川上涼子(2003)にとって休養は訓練を要するものであった。川上の手記において、医師からの診断・治療の段階で、ストレスを回避するものとしての休養が勧められた。しかし、それは「生きがい」「好きなこと」から距離をとることであった。そして川上は、好きなことでも負担・ストレスになるということが「身をもって納得」できること、できないことを「これも症状だ」と割り切るようになった。そうした経緯の末、川上は「やっと私は、休養を始めたのかもしれませんが」と書く。病者であることを受け入れる／病者になることにより、川上の休養は開始されたともいえるだろう。

3. 研究成果

本研究の中では「手記は自らの病い経験を参照しつつ、うつ病というカテゴリー全体が持つ意味を刷新し再定義しようとする言説実践である」として現れていることを示した。クラインマンの説明モデルの基本的なコンセプトは、病気になった人はそれを説明するというものであった。このモデルは、「この障害の本質は何か」「なぜ自分がその病いに冒されてしまったのか」「なぜそれが今なのか」といった疑問に答えを与えるものである。そこで問題になるのは、その説明のリソースをどこに求めているのか、何を参照して説明しているのかということである。本研究はその点を究明したものであった。つまり病いを説明するためには、「われわれの時代や生活を構成しているあらゆる特徴」が動員されるのである。それは「病者の自己物語」には限定されない。

参考文献

覚慶悟, 2003, 『よろしく、うつ病』彩流社.

川上涼子, 2003, 『消えてしまいたい—ある女子大生の鬱病日記』文藝春秋.

おくやまあい, 2004, 『20歳(ハタチ)。結婚。出産。病名「うつ病」。』文芸社.

杉山奈津子, 2012, 『うつ卒業レシピ』セブン&アイ出版.